尾崎地区　　歴史文化の視点２

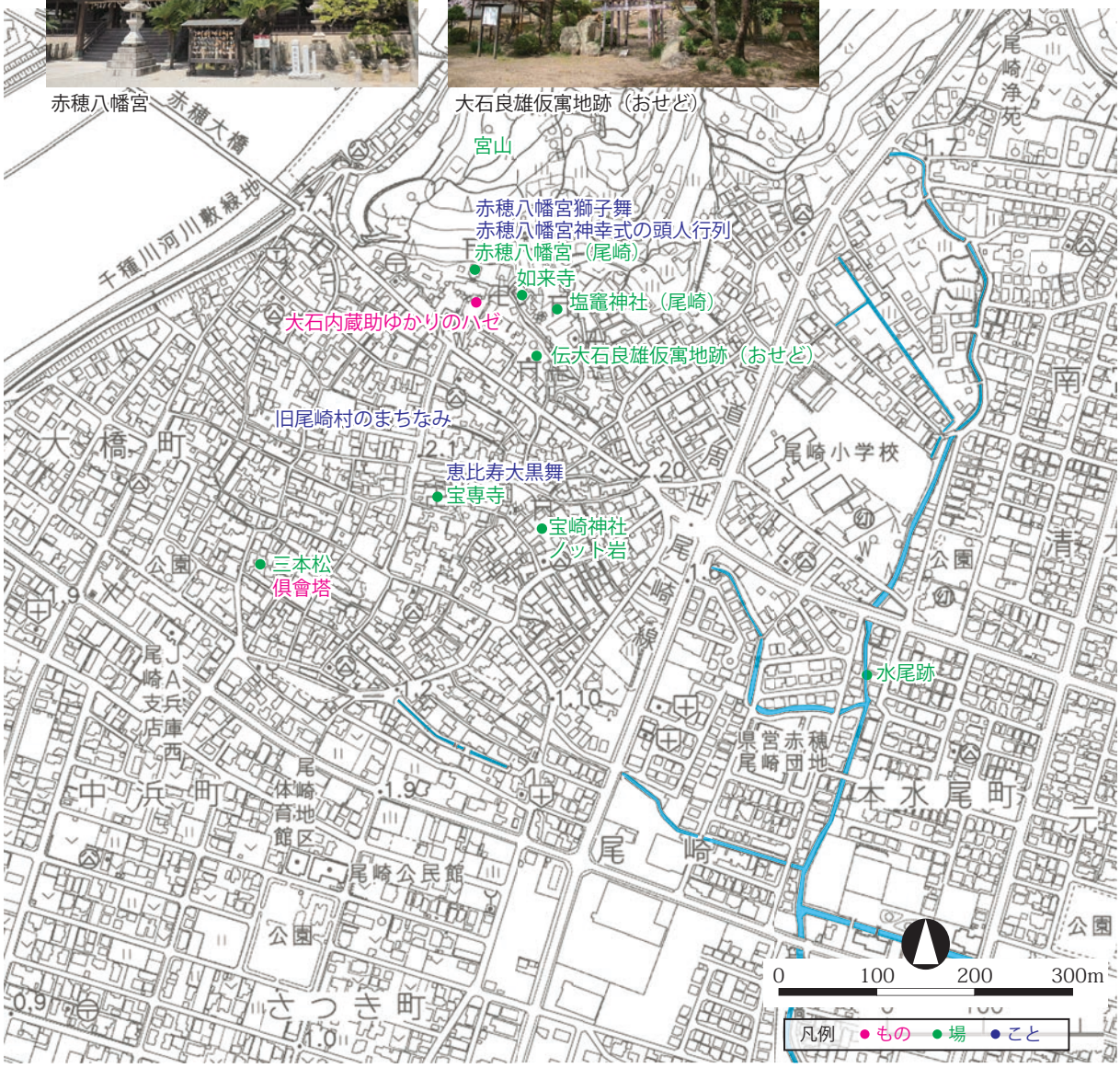
10．赤穂藩と尾崎

【ストーリー】

江戸時代に池田輝政が姫路城に入ると、赤穂はその末弟池田長政の知行地となった。慶長８（1603）年に赤穂代官として赴任した垂水半左衛門勝重は、はじめ尾崎に居を構えたという。

垂水勝重は、慶長10（1605）年に八幡宮を銭戸から今の地に移したともいい、この頃がおそらく尾崎地区の本格的な開発の開始であり、その目的は製塩であったことだろう。

赤穂八幡宮は赤穂藩との関わりが深く、同宮には大石内蔵助ゆかりの布袋額、ハゼの木、石灯籠、屏風をはじめ、赤穂義士関係の書状が多く残されている。また刃傷事件後に赤穂城を開城した後、遠林寺で残務処理を行う際に大石内蔵助良雄が住んでいたのが、伝大石良雄仮寓地跡（通称おせど：市指定史跡）であったという。

赤穂八幡宮

大石良雄仮寓地跡（おせど）